法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

新発見資料・ボストン美術館所蔵『獻英樓畫叢』に関する調査報告

NAGASAKI, Iwao / 長崎, 巌

(出版者 / Publisher)
The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University / 法政大学能楽研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
能楽研究 : 能楽研究所紀要
(巻 / Volume)
30
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
38
(発行年 / Year)
2006-06-30
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002860

Hosei University Repository

図３　ボストン美術館本『獻英樓畫叢』　17折裏

Hosei University Repository

図６　ボストン美術館本『獻英樓畫叢』貼り合わせ模写図１

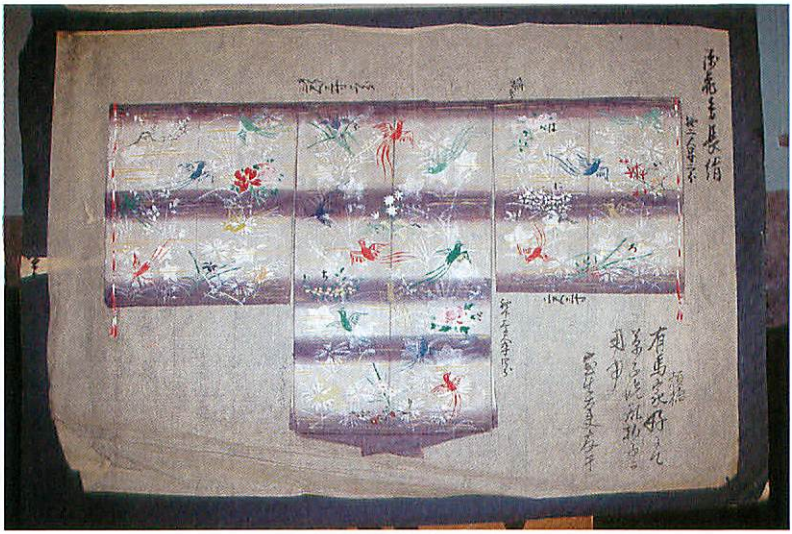

図７　ボストン美術館本『獻英樓畫叢』　作品番号10

Hosei University Repository

新発見資料・ボストン美術館所蔵『獻英樓畫叢』に関する調査報告

長崎　巌

はじめに

二〇〇五年八月六日より二十二日にかけ、科学研究費補助金・特定領域研究(2)「カネボウコレクションの能装束・能楽面の調査による技術の複合的保存・伝承の研究」(研究代表者・長崎巌、研究分担者・西野春雄)により、アメリカのボストン美術館において能装束及びこれに関連する可能性があると思われる未整理の冊子資料の調査を行った。能装束は同館アジア・アフリカ・オセアニア部と染織・服飾部の共同所管、未整理の冊子資料は同館アジア・アフリカ・オセアニア部の所管になるものである。今回の約二週間にわたる滞在では、実質十日間の間に、後者に関しては約三〇〇件の染織関連冊子類のうち、その八約割を調査することができたが、なお約二割は未調査のまま残った。しかしその過程で能面や能装束、また能の研究にとって非常に重要な資料である『獻英樓畫叢』の一冊を発見することができたのは、極めて幸運なことであった。

『獻英樓畫叢』は、その名が示すごとく、叢書のように複数冊からなる模写図の貼り込み帳であり、これまで東京

Hosei University Repository

図1　東京国立博物館本『獻英樓畫叢』表紙

図2　クレットマン本『獻英樓畫叢』表紙

国立博物館に所蔵されている一三冊(図1・東京国立博物館本と呼ぶ)とフランス・マルセイユ在住のピエール・クレットマン氏所蔵の四冊(註1)(図2・クレットマン本と呼ぶ)の存在のみが知られていた。これらについては一九九八年、筆者が「東京国立博物館保管『獻英樓畫叢』について」『ミュージアム』第五五七号(東京国立博物館発行・一九九八年十二月)において紹介しており、その中で『獻英樓畫叢』が、その時点では所在不明となっているさらに何冊かを含む大部の叢書であろうことを推測している。今回ボストン美術館で発見された『獻英樓畫叢』(ボストン美術館本と呼ぶ)は、まさにそうしたものの一冊である。内容の詳細は後に述べるが、貼り込まれた模写図に押された印章や作品の表示形式、記述の類似性などから、表紙・裏表紙などを欠失しているものの、東京国立博物館本・クレットマン本と一連のものであると考えられる。

1. ボストン美術館本発見の経緯

今回新発見の『獻英樓畫叢』(図3)は、他の未整理冊子資料(図4)とともにボストン美術館旧東洋部(近年、アフリカ・

Hosei University Repository

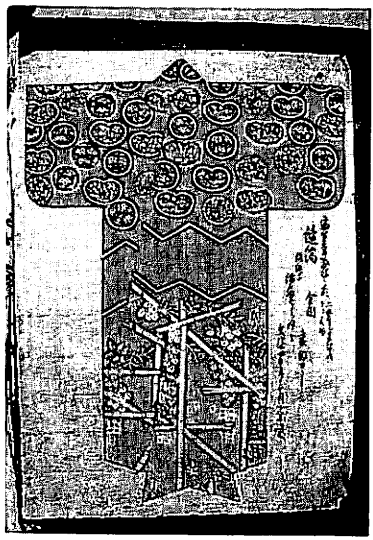

図3　ボストン美術館本『獻英樓畫叢』　17折裏

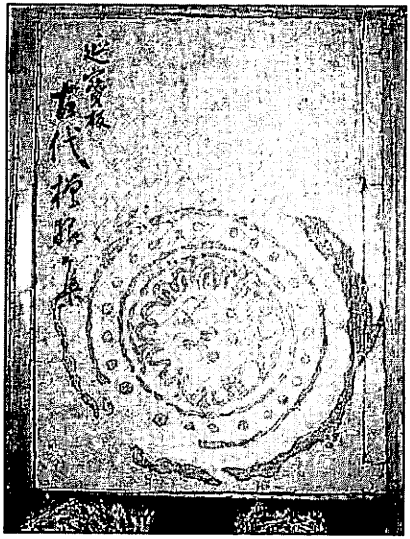

図4　ボストン美術館蔵『延宝板古代模様集』　表紙

オセアニア部と統合され、現在はアジア・アフリカ・オセアニア部と称されている)の建物三階部分から木箱に収納されたままの状態で搬出されたもので、調査にあたった時期には、木箱からアシッドフリーのダンボール製の薄型保存箱、約五十箱に移し替えられ、館内の仮収蔵庫に保管されていた。

近年ボストン美術館では、新たな展示面積の確保と老朽化した建物の改修のために大幅なリノベーションが行われており、旧東洋部も昨年よりその準備に取り掛かっていた。これらの冊子資料が収められた木箱は、モース・アティックと呼ばれる旧東洋部の三階屋根裏部分の片隅に長らく置かれたままになっていたものである。モース・アティックは、大森貝塚の発見で有名な生物学者エドワード・S・モースがボストン美術館に売却した約四、六〇〇点の陶磁器資料が収められていた部屋であることからこう呼ばれるが、長い間一般観覧者には公開されていなかったため、その存在を知る人は少ない。

モースは明治十年(一八七七)に来日し、東京帝国大学で生物学を教えたが、その後数度にわたる日本滞在中に膨大な数

Hosei University Repository

図5　ボストン美術館「モースの棚」

の日本の陶磁器や看板、生活用品といった民俗資料類を収集したことでも知られている。民俗資料類の多くは帰国後、出身地であるボストン北郊のセーラムにあるピーボディー博物館(現ピーボディー・エセックス博物館)の収蔵品となったが、陶磁器のコレクションは一八九三年、ボストン美術館によって購入された。優秀な学者であったモースは、収集した資料については、収集地その他の情報を丁寧に記録していたので、ボストン美術館の蔵品となった日本の陶磁器もそうした情報を伴うものであった。加えて、モースは当時のアメリカ人としては卓越した日本陶磁研究者でもあったから、一時期東洋部の臨時学芸員として、自らが売却した日本陶磁器の目録作りに携わることとなった。これらの陶磁器は現在、展示ケースを兼ねた二メートルほどの大きな収納棚(図5・同美術館では「モースの棚」と呼んでいる)約四〇本の中に収納されている。各棚における個々の資料の配列は、もともとモースが自らの見識に基づいて決めたものであり、美術館ではそのことを尊重して、長く陶磁器と棚を一体のものとして扱ってきた。

一八七六年に開館したボストン美術館が、設立当初のバックベイの地から、一九〇九年、ハンティントン通りに面する現在の地に移ったとき、陶磁器と棚もそのまま運ばれてきたものと推測される。そして前述の木箱もまた、他の美術品やモース・コレクションの陶磁器同様、バックベイの旧館から新館へと運ばれたのであろう。なぜなら、木箱に入っていた冊子資料類はいずれも明治時代中期以前のものばかりだからである。

筆者は一九八五年、文部省在外研究員としてボストン美術館所蔵の染織品調査のためにボストン滞在中、当館の学

Hosei University Repository

芸員アン・ニシムラ・モース氏(現アジア・アフリカ・オセアニア部長補佐、モースの孫サミュエル・C・モース氏夫人)にモース・アティックを案内された際、「モースの棚」の奥のほうにボストン美術館東洋部設立期以来、未整理のままになっているものがたくさんあるが、引き出すことができないため、今は中身を見ることができないという話を聞いた記憶がある。また後日、彼女はその中に小袖雛形本のようなものがあるらしいと語っていた。今回目にした木箱とその中身である冊子類は、まさにその時彼女が言っていたものだったのである。

どうやら東洋部設立以降、長い時間をかけて所蔵品の整理と目録作りを進めるなかで、列品となった大部分ものは東洋部の収蔵庫に収められたが、何らかの理由によって手がつけられなかったものについては物置のような別の部屋に長く留め置かれていたものと想像される。ハンティントンへの美術館移転後、一九五〇年代になって当時の館長ペリー・T・ラズボーン(一九五五年五月一日館長就任)の指示で、展示には適さないとして「モースの棚」とともにギャラリーから撤去されたモース・コレクションの陶磁器が、以後モース・アティックに納められたままになっていることからして、この部屋もまたそのような性格をもつ場所なのであろう。従って、この部屋にあった木箱とその中の冊子資料も、同様の価値判断がなされ、長らく整理されないままになっていたものと思われる。また「モースの棚」の奥にあったということは、ラズボーン館長の命によって約四〇本の棚がギャラリーから撤収されこの部屋に搬入される以前から、今回調査した冊子類の木箱がこの部屋の中に置かれていたことを示している。

木箱の冊子類が列品に組み入れられずに現在に至っている理由としては、まず第一に、それらが美術品ではなかったことが考えられる。同館が所蔵する他の日本美術品の質や内容と比較した場合、これらの冊子資料が全く人々の関心の対象とならなかったのもいたし方のないところであろう。第二に、箱の内容物のほとんどすべてが、江戸時代から明治時代前半にかけての版本や手稿、写本の類、もしくは明治時代の印刷物であり、しかもその数が厖大であった

Hosei University Repository

ことが考えられる。通常の美術品とは性格の異なる特殊なものであり、これらを整理しようにも同館には専門家がおらず、その作業は容易でなかったはずである。実際、今回これらが日の目を見たのも、モース・アティックから木箱が搬出されたのを機に、アジア・アフリカ・オセアニア部が日本の版本を専門とする学芸員、レイチェル・サンダース氏を新たに雇用し、調査を企画したことがきっかけとなっている。筆者の今回の調査も同部からの依頼に基づくもので、この共同調査は明治時代以来はじめてのことということになる。

2. ビゲロウ・コレクションと染織資料

数にして三〇〇点にも及ぶこれら冊子類は、総じて江戸時代後期から明治時代前期にかけての染織関連資料、具体的には小袖雛形本や衣裳図案帳、裂見本帳や色見本帳、小紋帳、模様集などがほとんどである。これらがどのような経緯でボストン美術館の所蔵品になったのかについては不明であるが、東洋部の設立と深く関わっているであろうこと、具体的には、東洋部蔵品の骨格を成す三つのコレクション、すなわちモース・コレクション、フェノロサ・コレクション、ビゲロウ・コレクションの中のどれかに含まれていたのではないかと考えられる。

このうちフェノロサ・コレクションは、東京帝国大学で生物学を教えていたモースの推薦で、同じく東京帝国大学で物理学と政治学の教鞭をとり、また当時の日本人に日本美術の素晴らしさを再確認させたことで知られるアーネスト・フランシスコ・フェノロサ(一八五三―一九〇八)が、明治十一年(一八七八)の来日以降十二年に及ぶ日本滞在中に収集したものである。ボストン美術館に入ったモース・コレクションが陶磁器に限られていることついては既に述べたとおりであるが、フェノロサ・コレクションも、彼の日本美術に対する関心のありようを反映して、一〇、〇〇〇点以上の日本絵画が中心となっている。これらは、ボストン美術館に寄贈することを条件にチャールズ・ウェルドに

Hosei University Repository

一旦売却されたが、その後約束どおり同美術館の所蔵品となっている。

これらに対して、ボストンの医師、ウィリアム・スタージス・ビゲロウ（一八五〇－一九二六）によって収集され、後にボストン美術館に寄贈されたビゲロウ・コレクションは、その内容が非常に幅広い。

ビゲロウは、ボストンの富豪でありまた医学の名門として知られた家に生まれ、自身も医学博士であったが、モースが一八八一年から八二年にかけての冬にボストンで行った日本に関する特別講義を聴講したのをきっかけに、一八八二年の五月、モースの三度目の来日に同行し、八七年の一時帰国を挟んで、九〇年に帰国するまでの長きにわたって日本に滞在している。その間様々な美術品を購入しているが、浮世絵を中心とする絵画や仏像彫刻、甲冑・刀剣、金工、漆工などとともに、能装束や小袖などの染織品を二〇〇点以上収集しており、アメリカ国内のみならず、日本を除く海外では、質・量ともに最も優れた日本染織品のコレクションである。他の二人が染織品にほとんど関心を示していないのに対し、ビゲロウは広範な好奇心を発揮しつつ、工芸では特に染織品に強い関心を示している。

このようなことからすると、木箱入りの冊子類もビゲロウの収集によるものではないかと推測される。それは、今回の冊子類発見の経緯が、一〇年ほど前に葛飾北斎の浮世絵版木がボストン美術館から発見されたときのそれに似ているからである。北斎の版木も今回の木箱のように長い間、収蔵庫以外の場所に未整理・未調査のまま放置されていたものであり、しかも後にビゲロウ・コレクションに含まれるものであることが判明しているのである。

前述、東京国立博物館本『獻英樓畫叢』は明治四十二年（一九〇九）、購入によって帝室博物館の蔵品となっているが、クレットマン本『獻英樓畫叢』は、ピエール・クレットマン氏の祖父にあたるルイ・クレットマン（一八五一－一九一四）が士官教育のためにフランスから日本の陸軍士官学校に派遣され、明治八年（一八七五）から同十一年（一八七八）まで東京に滞在した間に、いずこかで入手したものと伝えられている。ビゲロウの日本滞在期が明治十五年（一八

Hosei University Repository

八二)から二十三年(一八九〇)年にかけてであることを考えると、ルイ・クレットマンとビゲロウが、時期にずれはあるものの、日本におけるほぼ同様の環境下で『獻英樓畫叢』と出会い、あるいは同じ古美術業者(あるいは古物商)を通じて入手した可能性は高い。

3. 『獻英樓畫叢』の概略

三本の『獻英樓畫叢』

『獻英樓畫叢』がどのような資料であるかを理解するために、東京国立博物館本及びクレットマン本を例にその概略を述べる。

東京国立博物館本は、縦約四二センチ、横約三〇センチの折本仕立ての浅葱色の台紙に、中啓以下、能面・能装束・能小道具を中心に、絵画・工芸品などを模写した大小様々な大きさの和紙を張り込んだもので、渋引きの厚紙で作った表紙が付けられている。表紙の中央に「獻英樓畫叢」「獻英樓畫叢續編」「獻英樓畫叢殘編」「獻英樓畫叢拾遺」「獻英樓畫叢附録」などと墨書した白和紙題箋、その下部にこれに重ねるようにして、別筆で「初集　圖画五十三葉」のように、各巻の巻次と台紙に貼り込まれた模写図の枚数を記した薄茶色の紙箋を貼る。また、題箋等を除いた余白には、台紙に貼られた模写図の内容を目録のように墨書している。

一方、クレットマン本も表紙の様式は東京国立博物館本と全く同様で、「獻英樓畫叢」「獻英樓畫叢續編」「獻英樓畫叢拾遺」と墨書した東京国立博物館本と同筆・同寸の題箋を貼る。題箋上辺に朱で△や○を記したものが三冊に見られるが、これは東京国立博物館所蔵本の五冊にも見られる。また題箋下方の余白には題字と同筆で「初集　三」「二」「八集　三」「十八」などと記されているが、東京国立博物館所蔵本でも、薄茶色和紙の紙箋がめくれあがって

Hosei University Repository

いる「初集」・「十集」では、題箋下方にそれぞれ「一」及び「十集　三」の墨書が確認される。さらに、題箋の左右や下隣には、題箋と同質の紙に「たノ三」「ね二ノ二」「む一ノ二」「う二ノ三」と墨書しているが、東京国立博物館所蔵本では、「八集」にのみ「つ二ノ二」と記した同様の紙箋が見られる。

これらのことから、東京国立博物館本とクレットマン本は、もともと大部をなす一組の資料としてともにあったものと考えられる。また題箋に「獻英樓畫叢残編」「獻英樓畫叢附録」と記すものが各一冊であるのはさほど不自然ではないとしても、「獻英樓畫叢拾遺」と記すものが一一冊に上るのに対して、「獻英樓畫叢」「獻英樓畫叢續編」と記すものがわずか二冊ずつしかないのは、いかにも不自然に思われる。両本の題箋に記されたもとの巻次や、題箋脇に貼られた紙箋の記号と番号に目を転じても、それらは明らかに連続性を欠いており、『獻英樓畫叢』が両本以外に複数存在していたことは十分予想される。ボストン美術館本は表紙部分を欠いてはいるが、後述のように、貼り込まれた模写図の様式から、これがそうしたものの中の一冊であることは間違いないと思われる。

『獻英樓畫叢』の制作者

そもそも「獻英樓」は徳川御三卿のひとつ田安家[註2]の文庫名で、田安家伝来の資料にはしばしばこの名が見られる。更に、貼り込まれた模写図の表に田安家の蔵印である「田安府芸臺印」、裏に「獻英樓圖書記」と刻んだ朱印が捺されているものがあることから、これらを絵師に命じて模写させ、冊子に貼り込んだのが田安家であったことは明らかである。

貼り込まれた模写図の余白には、模写した器物・装束・絵画等の名称が墨書されているばかりでなく、模写に当たった年月日や絵師の名前なども記されている。模写の時期が文政七年～同十三年の時期、及び天保二年～三年の時

Hosei University Repository

期にわたっていることから、これらの模写図は、何年かにわたって描き集められたことがわかる。

さらに能装束が含まれる巻においては、これらに加えて、それぞれの作品の由来や着用者、更には装束が着用された演目や上演場所なども記されている。その場合、模写図の裏面に表面とほぼ同内容が記述されているものが多く、和紙の表面に記された内容に比べて裏面に記された内容の方が詳しいケースもある。

以上のことから、様々な対象物を複数の期間に渡って模写した多くの和紙は、すぐには台紙に貼り込まれないで、ある期間田安家にそのままの形で保存されたと考えられ、裏面のみに見られる朱筆の番号は、その際あるグループの模写図については整理番号として用いられたのであろう。そして作品を模写した時に紙の裏面に書き込まれたメモ的な情報は、のちに模写図が台紙に貼り込まれる際に、表の面に書き写されたものと推測される。

能装束の摸写図

『獻英樓畫叢』の当初の冊数は不明ながら、本書の大きな特徴は、染織に関わる資料を多く含んでいることで、その内容は、染織模様をはじめ、能装束・舞楽装束にまで及ぶ。特に能装束に関しては、個々の作品を彩色を用いて描くほか、装束の前面図・背面図に加えて、原寸の部分図も多数含くんでいる。しかもこれらには細部の施工や色彩に付いての書き込みも見られ、模写図ながら作品の詳細を知ることができる。

さらに、能装束の研究において『獻英樓畫叢』が特に大きな意味を持つと考えられるのは、現在は失われている作品や所在不明となっている作品、さらにはそもそも存在が知られていなかった作品についてもその具体的な内容を、忠実な描写と注記によって知ることができるということである。図の余白部分には、当時の所蔵者名のほか、模写した時期や場所に関する記述とともに、その際に作品の所蔵者から聞き取ったと思われる、作品に付いての様々な情報

Hosei University Repository

も記されている。

東京国立博物館本に収録されている能装束及び能関連の模写図は、「初集」に中啓と中啓の地紙の模写図二八枚、能装束の模写図二五枚、能面の模写図一枚、「四集」には能装束の模写図三九枚、「五集」には能装束の模写図四〇枚、能小道具の模写図二九枚、「六集」には能面の模写図五五枚、「七集」には中啓の地紙の模写図四〇枚、「九集」には能小道具の模写図二二枚、「一二集」には能面の模写図一枚、能舞台図一枚、能狂言図九一枚である。また、クレットマン本には、「獻英樓畫叢續編二」に能装束の模写図五〇枚が収録されている。

このように、『獻英樓畫叢』は能装束の研究ばかりでなく、能そのものの研究にとっても非常に貴重な資料であるが、以下では今回調査したボストン美術館本について、以上の概要と比較しながら、その内容を紹介していきたいと思う。

4. ボストン美術館本の概要

縦約四三・五センチ、横約三〇・五センチ。書簡の反古紙を芯にして、鼠がかった浅葱色の和紙でこれを両面から覆い、折本に仕立てている。紙質と色は東京国立博物館本・クレットマン本と近似している。芯に用いられている書簡には「文政九戌年五月二日」付けのもの、「文政十亥年閏六月」付けのものが見られるが、前者は「福田忠次郎様御役所」とあり、知行地から役所(田安家)に対して出された嘆願書かと考えられる。なお、表紙・裏表紙は欠失している。

模写図は折本仕立ての両面に貼りこまれているが、用途不明の一種を除くすべての模写図は能装束に関するものである。以下、頁を追って模写図の概略を紹介し、模写図に記された墨書や捺された印章などの詳細は次節「模写され

Hosei University Repository

た能装束の内容」に譲る。なお、便宜上、片面をA面、反対面をB面と呼ぶことにする。

（A面）

一折表　地紙のみで、貼り込みなし。

一折裏〜二折表　白地牡丹菊唐草模様舞衣（七折裏に前面図、八折表に背面図あり）の部分図を貼り込む。

二折裏〜三折表　紅地花丸唐草模様長絹の部分図を貼り込む。

脱落した模写図一枚が右端に繋がる。

三折裏〜四折表　紫地霞笹模様長絹（四折裏〜五折表に部分図あり）の部分図（五紋の部分）を貼り込む。

四折裏〜五折表　紫地霞笹模様長絹（三折裏〜四折表に部分図あり）の部分図（腰の部分）を貼り込む。

五折裏　萌黄地露薄模様長絹（六折表に背面図、六折裏〜七折表に部分図あり）の前面図を貼り込む。

六折表　萌黄地露薄模様長絹（五折裏に前面図、六折裏〜七折表に部分図あり）の背面図を貼り込む。

Hosei University Repository

六折裏～七折表　萌黄地露薄模様長絹（五折裏に前面図、六折表に背面図あり）の部分図（五紋の部分）を貼り込む。

七折裏　白地牡丹菊唐草模様舞衣（一折裏～二折表に部分図、八折表に背面図あり）の前面図を貼り込む。

八折表　白地牡丹菊唐草模様舞衣（一折裏～二折表に部分図、七折裏に前面図あり）の背面図を貼り込む。

八折裏　紅地霞萩模様長絹の前面図（九折表～一〇折表に部分図あり）を貼り込む。

九折表～一〇折表　紅地霞萩模様長絹（八折裏に前面図、一〇折裏～一一折表に部分図あり）の部分図（袖上端から下端まで）を貼り込む。

記述無し。

一〇折裏～一一折表　萌黄地露薄模様長絹（五折裏に前面図、六折表に背面図、六折裏～七折表に部分図あり）の部分図（腰の部分）を貼り込む。

図の紙片一枚を欠失している。

一一折裏　紅地花籠藤模様長絹（「貼り合わせ模写図1」に部分図あり）の部分図（五紋の部分）を貼り込む。

「貼り合わせ模写図1」が、この下に続く部分と推測される。

Hosei University Repository

一二折表　紫地波松帆掛舟模様長絹（B面一七折表に前面図、「貼り合わせ模写図3」に部分図あり）の背面図を貼り込む。

一二折裏～一三折表　紫地綾杉楽器模様唐織（一三折裏～一四折表に部分図、一四折裏～一五折表に部分図、一五折裏～一六折表に部分図、一六折裏に背面図あり）の部分図（背面右袖の部分）を貼り込む。

一三折裏～一四折表　紫地綾杉楽器模様唐織（一二折裏～一三折表に部分図、一四折裏～一五折表に部分図、一五折裏～一六折表に部分図、一六折裏に背面図あり）の部分図（背面右肩部分）を貼り込む。

一四折裏～一五折表　紫地綾杉楽器模様唐織（一二折裏～一三折表に部分図、一三折裏～一四折表に部分図、一五折裏～一六折表に部分図、一六折裏に背面図あり）の部分図（背面右脇部分）を貼り込む。

記述無し。

一五折裏～一六折表　紫地綾杉楽器模様唐織（一二折裏～一三折表に部分図、一三折裏～一四折表に部分図、一四折裏～一五折表に部分図、一六折裏に背面図あり）の部分図（背面右裾部分）を貼り込む。

一六折裏　紫地綾杉楽器模様唐織（一二折裏～一三折表に部分図、一三折裏～一四折表に部分図、一四折裏～一五折表に部分図、一五折裏～一六折表に部分図あり）の背面図を貼り込む。

Hosei University Repository

一七折表　紅地団扇花丸藤棚模様縫箔（一七折裏に背面図、一八折表～一八折裏に部分図、「貼り合わせ模写図2」に部分図あり）の前面図を貼り込む。

一七折裏　紅地団扇花丸藤棚模様縫箔（一七折表に前面図、一八折表～一八折裏に部分図、「貼り合わせ模写図2」に部分図あり）の背面図を貼り込む。

一八折表～一八折裏　紅地団扇花丸藤棚模様縫箔（一七折表に前面図、一七折裏に背面図、「貼り合わせ模写図2」に部分図あり）の部分図（袖の部分）を貼り込む。

記述無し。

一九折表　紫地秋草桜草模様長絹（二一折裏に背面図あり）の左前面図を貼り込む。

一九折裏　水色地雲花輪違模様縫箔（二〇折表に背面図、二〇折裏～二一折表に部分図あり）の前面図を貼り込む。

二〇折表　水色地雲花輪違模様縫箔（一九折表に前面図、二〇折裏～二一折表に部分図あり）の背面図を貼り込む。

記述無し。

二〇折裏～二一折表　水色地雲花輪違模様縫箔（一九折裏に前面図、二〇折表に背面図あり）の部分図（右前袖の部分）を貼

Hosei University Repository

り込む。

二一折裏　紫地秋草桜草模様長絹（一九折表に前面図あり）の背面図を貼り込む。

（B面）

一折裏～二折表　梅鶴図案の梅の部分図（1）を貼り込む。

記述無し。

二折裏～三折表　梅鶴図案の梅の部分図（2）を貼り込む。

記述無し。

三折裏～四折表　梅鶴図案の梅の部分図（3）を貼り込む。

記述無し。

四折裏～五折裏　梅鶴図案の梅と鶴の部分図（4）を貼り込む。

一三折裏～一四折表の右側部分か。

六折表　貼り込みの痕跡あり。

Hosei University Repository

六折裏～七折表　梅鶴図案の梅の部分図(5)を貼り込む。
記述無し。(11)の鶴の下の部分図か。

七折裏～九折表　梅鶴図案の梅と鶴の部分図(6)を貼り込む。
表面に「り」の墨書あり。
「ぬ」の右側部分か。

九折裏～一一折表　梅鶴図案の梅と鶴の部分図(7)を貼り込む。
表面に「ぬ」の墨書あり。
「り」の左側部分か。

一一折裏～一三折表　貼り込みの痕跡あり。脱落した模写図が四枚挿まれている。
梅鶴図案の鶴の部分図(8)を貼り込む。
表面に「に」の墨書あり。

梅鶴図案の鶴の部分図(9)を貼り込む。
表面に「ほ」の墨書あり。

Hosei University Repository

梅鶴図案の鶴の部分図(10)を貼り込む。
表面に「ち」の墨書あり。

梅鶴図案の鶴の部分図(11)を貼り込む。
表面に「る」の墨書あり。

一三折裏～一四折表　梅鶴図案の梅と鶴の部分図(12)を貼り込む。
表面に「を」の墨書あり。
四折裏～五折裏の左側部分図か。

一四折裏　紫地松月観世水模様長絹(一五折表に背面図、一五折裏～一六折表に部分図、二〇折表に部分図あり)の前面図を貼り込む。

一五折表　紫地松月観世水模様長絹(一四折裏に前面図、一五折裏～一六折表に部分図、二〇折裏～二一折表に部分図あり)の背面図を貼り込む。

一五折裏～一六折表　紫地松月観世水模様長絹(一四折裏に前面図、一五折表に背面図、二〇折裏～二一折表に部分図あり)の部分図(五紋の部分)を貼り込む。

Hosei University Repository

一六折裏　紅地鳥兜楽器模様長絹（一九折裏～二〇表に前面図あり）の背面図を貼り込む。

一七折表　紫地波松帆掛舟模様長絹（A面一二折表に背面図、「貼り合わせ模写図2」に部分図あり）の前面図を貼り込む。

一七折裏　白地霞巴紋散らし模様腰帯の部分図を貼り込む。

一八折表　染分地秋草尾長鳥模様長絹の背面図を貼り込む。

一八折裏　紫地椿立木模様長絹（一九折表に左前身図あり）の背面図を貼り込む。

一九折表　紫地椿立木模様長絹（一八折裏に背面図あり）の左前身図を貼り込む。

一九折裏～二一折表　貼り込みの痕跡あり。脱落した模写図が二枚挿まれている。便宜的にこれら二枚がここに貼り込まれていたものとして扱う。

一九折裏～二〇折表　紅地鳥兜楽器模様長絹（一六折裏に背面図あり）の前面図を貼り込む。

二〇折裏～二一折表　紫地松月観世水模様長絹（一四折裏に前面図、一五折表に背面図、一五折裏～一六折表に部

Hosei University Repository

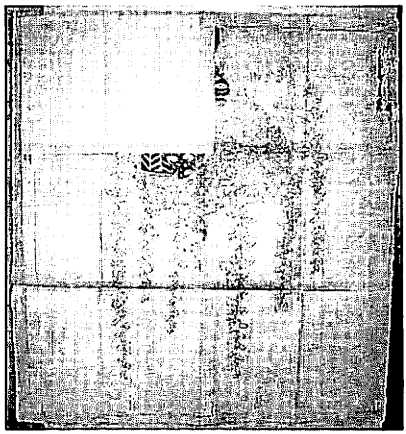

図6　ボストン美術館本『獻英樓畫叢』
貼り合わせ模写図1

分図(裾の部分)を貼り込む。

以上紹介してきた、模写図を台紙に貼り込んだものとは別に、各二枚ないし四枚の模写図を貼り合せ、裏打ちしたもの(図6)が3点、既述の台紙貼りとともに伝存しており、これらはその内容から『獻英樓畫叢』から脱落したものであると考えられる。以下、これらを「貼り合わせ模写図1、2、3」と呼んでその内容を記す。

貼り合わせ模写図1　紅地花籠藤模様長絹(A面一一折裏に部分図あり)の部分図(五紋の部分)　縦七一・八センチ　横八三・〇センチ

縦約二四センチ、横約四二センチ強の和紙五枚を張り合わせた上に図を描いている。左上部分を欠失する。

A面一一折裏の紅地花籠藤模様長絹の部分図(五紋の部分)に繋がる。

貼り合わせ模写図2　紅地団扇花丸藤棚模様縫箔(A面一七折表に前面図、一七折裏に背面図、一八折表～一八折裏に部分図あり)の部分図(左前身頃裾の部分)　縦五五・一センチ　横七八・三センチ

縦約二八センチ、横約四〇センチの和紙四枚を張り合わせた上に図を描いている。

貼り合わせ模写図3　紫地波松帆掛舟模様長絹(A面一二折表に背面図あり)の部分図(背上方の部分)　縦七三・八セン

Hosei University Repository

チ　横八・・・センチ

縦約二五センチ、横約四一センチ強の和紙六枚を張り合わせた上に図を描いている。

5．模写された能装束の内容

各能装束図に記された記述等

以下は、各模写図に見られた墨書等を各能装束ごとにまとめたものである。

（1）紅地花丸唐草模様長絹（A面二折裏～三折表に部分図）

表面に「ほら織紅地長絹／宝生大夫家形」「御長絹／紅地金唐草／花之丸」の墨書あり。裏面に「長絹／ほら織　紅地　宝生大夫家之形」の墨書あり。また「獻英樓圖書記」の朱印を捺し、「葉」の墨書と「四」の朱書を加える。脱落した模写図1枚が右端に繋がる。その表面に「文政八乙酉三月廿日　雲満寫」の墨書あり。

（2）紫地霞笹模様長絹（A面三折裏～四折表に部分図〈五紋の部分〉、四折裏～五折表に部分図〈腰の部分〉）

記述なし。

（3）萌黄地露薄模様長絹（A面五折裏に前面図、六折表に背面図、六折裏～七折表に部分図〈五紋の部分〉、一〇折裏～一一折表に部分図〈腰の部分〉）

・前面図表面に「文化元年四月廿八日神田橋而拝領／萌黄薄露玉長絹／宝生大夫蔵」の墨書あり。

Hosei University Repository

・背面図表面に「文化元年四月廿八日神田橋而拝領／萌黄薄露玉長絹／宝生大夫蔵」の墨書あり。
・部分図〈五紋の部分〉表面に「地萌黄文金白」の墨書あり。裏面に「獻英樓圖書記」の朱印を捺し、「葉」の墨書と「六」の朱書を加える。
・部分図〈腰の部分〉表面に「文政十一子年／四月十九日静雍写」紋金白糸霞織立長絹」「紋金かすみ白いと／ほら地おり立て」の墨書あり。

(4)紅地霞萩模様長絹〈A面八折裏に前面図、九折表～一〇折表に部分図〈袖上端から下端まで〉〉
・前面図表面に「神門御蔵／紋金白糸霞織立長絹」「紋金かすみ白いと／ほら地おり立て」の墨書あり。裏面に「神門御蔵／紋金白糸霞織立長絹」の墨書あり。

(5)紅地花籠藤模様長絹〈A面一一折裏に部分図〈五紋の部分〉、B面「貼り合わせ模写図1」に部分図〈五紋の部分〉〉
・部分図〈五紋の部分〈A面一一折裏〉〉表面に「地色　竪糸深／横糸モ」の墨書あり。
・部分図〈五紋の部分〈貼り合わせ模写図〉〉表面に「ぬき替籠ニ下り藤長絹」の墨書あり。また図中に「黄ノ所金」、図外に「スホウ」「エギ」と墨書する。裏面に「ぬき替かこに下り藤長絹〈一文字消す〉寶生大夫家之形」の墨書あり。また「獻英樓圖書記」の朱印を捺し、一文字消して「葉」と墨書し、「一」の朱書を加える。

(6)紫地波松帆掛舟模様長絹〈A面一二折表に背面図、B面一七折表に前面図、B面「貼り合わせ模写図3」に部分図〈背上方の部分〉〉

Hosei University Repository

・背面図表面に「㊀二／むらさき地波ニ松大紋波ニ帆遠舟長絹／正徳五未年九月廿六日神田橋御能被成／秀山地取」の墨書あり。

・前面図表面に「㊀二／むらさき地波ニ松大紋波ニ帆遠舟長絹　前／正徳五未年九月廿六日神田橋御能被成秀山地取」の墨書あり。

・部分図〈背上方の部分〉表面は記述なし。裏面に「二」（墨で消す）、「むらさき地波ニ松大紋波ニ帆遠舟長絹／正徳五未年九月廿六日神田橋御能／出来　宝生弥五郎より着出」の墨書あり。また「獻英樓圖書記」の朱印を捺し、「菜」と墨書し、「八」の朱書を加える。

（7）紫地秋草桜草模様長絹（A面一九折表に左前面図、二一折裏に背面図）

・左前面図表面に「紫ほら地大紋金秋草桜艸長絹／上ニ同」の墨書あり。

・背面図表面に「紫ほら地大紋金秋草桜艸長絹／天保十三寅年／清水中納言様於御本丸吉野静御能被遊候節御拝領」の墨書あり。また図中に「地紫／紋金」の墨書あり。

（8）紫地松月観世水模様長絹（B面一四折裏に前面図、一五折表に背面図、一五折裏～一六折表に部分図〈五紋の部分〉、二〇折裏～二一折表に部分図〈裾の部分〉）

・前面図表面に「紫松ニ流月長絹前」の墨書あり。また図中に「地紫表」の墨書あり。

・背面図表面に「紫松ニ流月長絹後」の墨書あり。また図中に「地紫表」の墨書あり。

・部分図〈五紋の部分〉表面に「紫松ニ流月長絹」の墨書あり。また図中に「地紫」「常色金」「同色吉金」の墨書あり。

Hosei University Repository

裏面に「紫松ニ流月長絹　宝生大夫家之形」の墨書あり。また「獻英樓圖書記」の朱印を捺し、一文字消して「葉」と墨書し、「二」の朱書を加える。

・部分図（裾の部分）表面に「紫松ニ流月長絹」の墨書あり。また図中に「地紫」「色吉金□」と墨書する。

（9）紅地鳥兜楽器模様長絹（B面一六折裏に背面図、一九折裏～二〇折表に前面図）

・背面図表面に「ほら織立紅地　宝生大夫家ノ形」の墨書あり。

・前面図表面に「ほら織紅地　宝生大夫家ノ形」の墨書あり。

（10）染分地秋草尾長鳥模様長絹（B面一八折表に背面図、東京国立博物館本・第四集に前面図と房の図あり）

・背面図表面に「蹈花鳥長絹／頼徳／有馬家好にて／草子乱調子に／用ゆ／宝生大夫友干」の墨書あり。また図中に寸法を記す。

（11）紫地椿立木模様長絹（B面一八折裏に背面図、一九折表に左前身図）

・背面図表面に「紗地紫大紋椿立木裾花つなき長絹後口之圖　宝生」「源氏供養　舞入候節」の墨書あり。

・左前身図表面に「紗地紫大紋椿立木裾花つなき長絹」「文化元甲子年十月出来　宝生」の墨書あり。

（12）白地牡丹菊唐草模様舞衣（A面一折裏～二折表に部分図、七折裏に前面図、八折表に背面図）

・部分図表面に「白地金牡丹菊花之丸唐草舞衣」の墨書あり。裏面に「白地金牡丹菊花之丸唐草舞衣　宝生弥五郎着

Hosei University Repository

出」の墨書あり。また「獻英樓圖書記」の朱印を捺し、「異」の墨書と「二」の朱書を加える。

・前面図表面に「白地金牡丹菊花之丸唐草舞衣／文化六年巳とし九月仕立／寶生」の墨書あり。

・背面図表面に「白地金牡丹菊花之丸唐草舞衣／文化六年巳とし九月仕立／寶生」の墨書あり。

(13)紫地綾杉楽器模様唐織（A面一二折裏～一三折表に部分図〈背面右袖の部分〉、一三折裏～一四折表に部分図〈背面右肩部分〉、一四折裏～一五折表に部分図〈背面右脇部分〉、一五折裏～一六折表に部分図〈背面右裾部分〉、一六折裏に背面図）部分図〈背面右袖の部分〉表面に「紫地楽器縫箔（墨で消す）唐織／天保二卯年十月」の墨書あり。

・部分図〈背面右肩部分〉表面に記述無し。裏面に「紫地楽器縫箔」の墨書あり。また「獻英樓圖書記」の朱印を捺し、「魯」の墨書と「二」の朱書を加える。

・部分図〈背面右脇部分〉は記述無し。

・部分図〈背面右裾部分〉表面には「天保二卯年十月十五日／近藤雍慎寫」の墨書あり。裏面に「紫地楽器縫箔」の墨書あり。また「獻英樓圖書記」の朱印を捺し、「魯」の墨書と「二」の朱書を加える。

・背面図に「紫地楽器縫／裏紅ユルシ」「天保二卯年十一月／雍慎寫」の墨書あり。

(14)紅地団扇花丸藤棚模様縫箔（A面一七折表に前面図、一七折裏に背面図、一八折表～一八折裏に部分図〈袖の部分〉、B面「貼り合わせ模写図2」に部分図〈左前身頃裾の部分〉）

・前面図表面に「宝生大夫家之形／上丸尽し金琴柱／下藤棚／縫箔　全圖／裏緋ゆるし／緋緞子／繻子綸子ニテモ□／文化十四丑年三月御写被成」の墨書あり。

Hosei University Repository

・背面図表面に「同　後口」「宝生流家ノ形／縫箔　緋緞子繻子綸子ニ而□□／上丸尽し金琴柱／下タ藤棚／裏緋ゆるし」の墨書あり。裏面に「宝生流家之形／上丸尽し金琴柱／下タ藤棚／縫箔　全圖　五枚之内／緋緞子／繻子綸子ニ而モ被□□／裏緋ゆるし／文化十四丑年三月写し被成」の墨書あり。また「獻英樓圖書記」の朱印を捺し、「率」を朱で消し、「裳」と墨書し、「十七」を墨で消し、「三」と朱書する。

・部分図〈袖の部分〉記述なし。

・部分図〈左前頃裾の部分〉表面に記述無し。裏面に「宝生流家之形／縫箔／緋緞子／全図別ニ有之／五枚之内〈朱で消す〉」の墨書あり。また「獻英樓圖書記」の朱印を捺し、「率」を朱で消し、「裳」と墨書し、「廿二」を墨で消し、「四」と朱書する。

(15)水色地雲花輪違模様縫箔（A面一九折表に前面図、二〇折表に背面図、二〇折裏～二一折表に部分図〈右前袖の部分〉）

・前面図表面に「花色千筋雲やり花輪違」の墨書あり。

・背面図に記述無し。

・部分図〈右前袖の部分〉表面に「花色千筋雲やり花輪違　裏緋ユルシ　宝生大夫家之形」の墨書あり。裏面にも記述があるが、模写図が台紙に貼り付けられており、解読できない。

(16)白地霞巴紋散らし模様腰帯（一七折裏に部分図）

・表面に「㊀古　白地霞巴散／寶生／弱法師／腰帯」の墨書あり。また図の横に「地白巴茶糸ヌヒ霞スリコミクマ同スリコミ」の墨書あり。

Hosei University Repository

(17)梅鶴図案(B面一折裏～二折表、二折裏～三折表、三折裏～四折表、四折裏～五折裏、六折表、六折裏～七折表、七折裏～九折表、九折裏～一一折表、一一折裏～一三折表、一三折裏～一四折表に部分図)

・部分図(1)記述無し。
・部分図(2)記述無し。
・部分図(3)記述無し。
・部分図(4)表面に「と」の墨書あり。また図中に「アサキ」「白」と薄墨で記す。
・部分図(5)記述無し。
・部分図(6)表面に「り」の墨書あり。
・部分図(7)表面に「ぬ」の墨書あり。
・部分図(8)表面に「に」の墨書あり。
・部分図(9)表面に「ほ」の墨書あり。
・部分図(10)表面に「ち」の墨書あり。
・部分図(11)表面に「る」の墨書あり。
・部分図(12)表面に「を」の墨書あり。

模写図と記述等に関する考察

ボストン美術館本に模写図が収録されている能装束は、総計一六点のうち、長絹が一一点と最も多く、そのほか舞衣一点、縫箔二点、唐織一点、腰帯一点が見られる。また種別不明の図案も一件見られる。これらのうち「染分地秋

Hosei University Repository

草尾長鳥模様長絹」（図7・作品番号10）は、東京国立博物館本・第四集に前面図（図8・『ミュージアム』第五五七号所載、作品番号23）と房の図が見られ、表紙は失われているとはいえ、前述の仕様上の共通性と合わせて、ボストン美術館本が確かに他の二本とある時期までともにあったことがわかる。

ここで、東京国立博物館本のうちの三冊、クレットマン本のうちの一冊に収録されている能装束九六点の内訳を見てみると、小袖ものが総計五四点と多く、そのうち唐織は二四点、厚板は六点、厚板唐織は三点、縫箔は一二点、摺箔九点を占める。一方、大袖ものは総計六点と少なく、この中には狩衣四点、水衣一点、長絹一点が含まれている。この他、大口一点、角帽子一点が見られるほか、帯類は腰帯一六点、髪帯一八点、総計三四点と数が多い。

これらに比較すると、ボストン美術館本では大袖ものの占める割合が大きいことが特徴として指摘できる。また東京国立博物館本・クレットマン本・ボストン美術館本の三本を合わせると、装束の種類としては、小袖ものでは唐織二五点・縫箔一四点・摺箔九点・厚板六点・厚板唐織三点、大袖ものでは狩衣四点・長絹一二点・舞衣一点・水衣一点、袴類では大口一点、その他角帽子一点・腰帯一七点・髪帯一八点となるが、小袖ものに毀斗目、大袖ものに法被・側次、袴類に半切など能装束として主要なものの一部が見られないことがわかる。

このことからも、『獻英樓畫叢』が現存する三本以外にも存在することは明らかであると思われるが、次に、模写図の貼り込みの順序及び三本の模写図収録の相互関係などから、田安家で模写図が台紙に貼り込まれた経緯と事情について、少々考えてみたい。

『獻英樓畫叢』に貼りこまれた能装束の模写図は、前面図・背面図と部分図からなるが、現状では個々の装束によって、これら三種を完備するものと、このうちの一つあるいは二つのみ見られるものとがある。ボストン美術館本に収録されている能装束一六点に関しては、三種を完備するもの七点、前面図と背面図を持つもの三点、前面図と部

Hosei University Repository

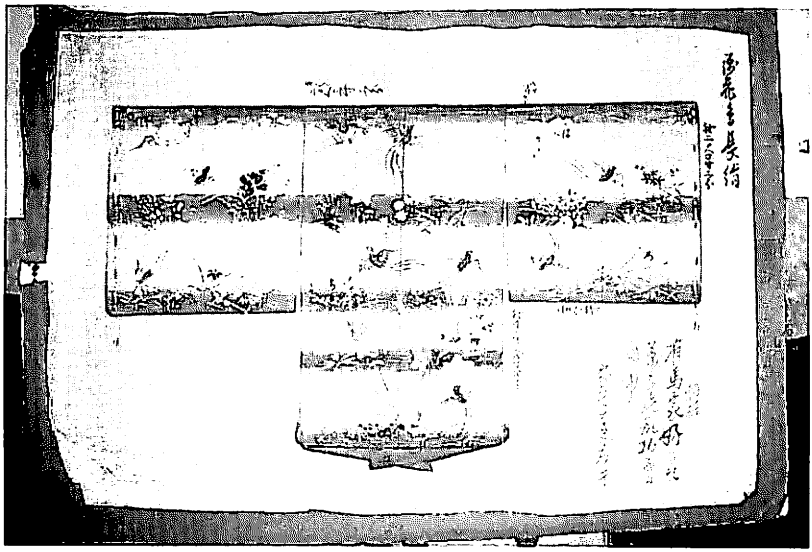

図7　ボストン美術館本『獻英樓畫叢』　作品番号10

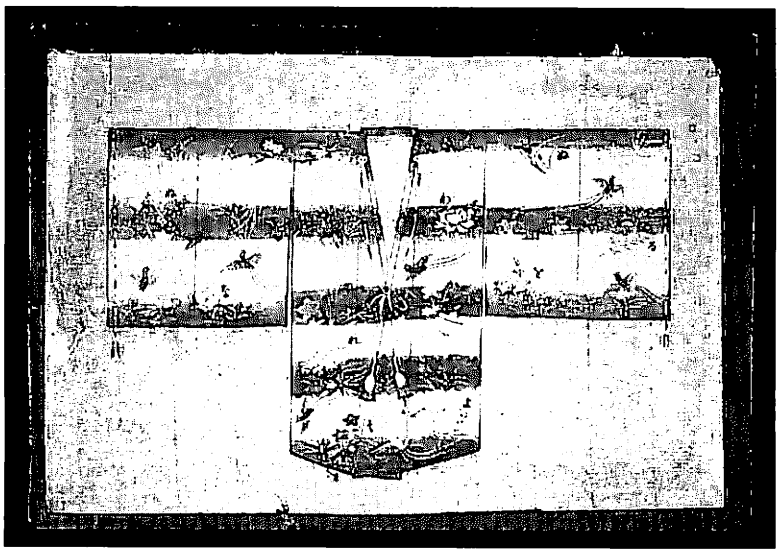

図8　東京国立博物館本『獻英樓畫叢』　『ミュージアム』第557号所載、作品番号23

Hosei University Repository

分図を持つもの一点、背面図と部分図を持つもの一点、部分図だけのもの四点という内訳になる。

東京国立博物館本とクレットマン本に収録された九六点の能装束のうち、東京国立博物館本とクレットマン本に図が分かれて収録されているものは七点のみであり、それらはいずれも、東京国立博物館本では「初集」、クレットマン本では「獻英樓畫叢續編二」の題箋を持つ一冊に見られる。また東京国立博物館本においては一つの装束図がいくつかの集に分かれて収録されている例はない。ただし両本所載の能装束の模写図も、ボストン美術館本に見られるのと同じく、三種を完備するものは必ずしも多くないことから、これら三本以外にも未発見の『獻英樓畫叢』が何冊か存在しているものと推測される。

更に、同一冊に三種の模写図が貼り込まれている場合にも、これらがひとまとまりになって続いた折(ページ)に貼り込まれているわけではない。各図が離れた折(ページ)に貼られていたり、またひとまとまりである場合にも、これらに例えば前面図・背面図・部分図といったような図の順序が見られるわけではない。

以上のように、基本的には模写図は各作品ごとに同一冊に貼り込もうと意図されてはいるが、事前に模写図を装束の種類ごとや、個々の装束ごとにまとめたり、またその中でも図の順序を考慮したりといったことが行われていないことから、『獻英樓畫叢』の制作に関しては次のような経緯が想像される。

おそらく何年間かにわたって(文政七年頃から天保三年頃にかけて)描き集められ、ある時期まで整理されずにそのまま保管されていたこれらの模写図は、何らかの理由で急遽台紙に貼り込まれることになり、その際、比較的急いで作業が行われたのであろう。果たして、これらの模写図は何ゆえに制作されたのであろうか。

これらの模写が行われた文政から天保頃は、一般的に様々な古物の模写が行われたほか、博物学も盛んになった時期であり、能装束以外に収録されている模写図全体を概観する限り、『獻英樓畫叢』もその延長線上にあるように見

Hosei University Repository

える。しかし能装束に関しては、原寸大の部分図が多く見られ、それらの中には各部に法量や色名を書き込んだものもあることから、これらが単なる教養的な模写図ではなく、何らかの実用的な目的を持つものである可能性が強い。能装束の模写図には、前述のように様々な内容を記した墨書が見られるが、その記述からは、収録されている装束の多くは宝生流の形に則ったものであり、また数点については宝生大夫所持であることがわかる。例えば、ボストン美術館本所収の模写図には、「文化元年四月廿八日神田橋而拝領／萌黄薄露玉長絹／宝生大夫蔵」「㋮白地金牡丹菊花之丸唐草舞衣／文化六年巳とし九月仕立／寶生」「文化元甲子年十月出来　宝生」などの墨書が見え、これらは明らかに宝生大夫所持の能装束を模写したことをうかがわせる。このほか東京国立博物館本・クレットマン本にも同様の記述が見られ、例えばクレットマン本所載の「赤白段麻葉菊模様唐織」（同前、作品番号90）には、「正徳六年申壬二月廿五日　御祝儀御能之節拝領／赤白麻ノ葉菊唐織　宝生太夫蔵／文政十一子四月廿日　雲満写」の記述、東京国立博物館本所収の「白地御簾楓模様唐織」（図9・同前、作品番号77）には「白地金御簾楓／唐織／宝生太夫所持」の記述が見られる。

またその他いくつかのものは、ボストン美術館本所載「紅地霞萩模様長絹」（作品番号4）に「神門御蔵／紋金白糸霞織立長絹」、東京国立博物館本所載「紺地菊籠目模様摺箔」（同前、作品番号83）に「神田様御装束／紺地菊籠目摺箔」と記されているように、明らかに一橋家において模写されたか、あるいは一橋家所蔵の能装束を模写したと考えられる。更にボストン美術館本には、清水家所蔵の能装束を模写したと考えられる作品もあり、「紫地秋草桜草模様長絹」（作品番号11）には「紫ほら地大紋金秋草桜艸長絹／天保十三寅年／清水中納言様於御本丸吉野静御能被遊候節御拝領」の墨書が見られる。

すべてではないまでも模写図の多くが、江戸時代後期に、将軍家及びその親戚筋にあたる一橋家・田安家・清水家

Hosei University Repository

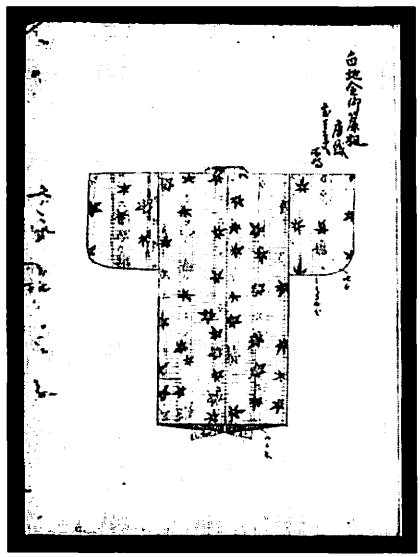

図9　東京国立博物館本「獻英樓畫叢」同前、作品番号77

によって特に引き立てられていた宝生大夫所持の能装束を写したもの、あるいはその流派を支持する一橋家・清水家のものであることは、ごく自然なことであるように思われる。

ところでこれらの模写図が、江戸城における演能の機会を多く持っていた宝生家や、その際に使用される装束を貸し出したともいわれる[註3]一橋家の能装束を中心に模写したものであったとして、田安家がこれらの家に絵師を派遣し、それらの能装束を模写させた目的は何であったのか。東京国立博物館本以下三本の『獻英樓畫叢』に収録されている能装束の総数や、各種別それぞれの数は、大名家所蔵の能装束の数としてはもちろんのこと、能楽宗家所持の装束としても比較的数が少ないといえる。そのことが『獻英樓畫叢』の他本の存在を予想させるとしても、詳細な原寸大部分図の存在や、装束によっては一領のいくつもの部分を執拗に模写していることから、これらは能装束の「写し」(模造)を作るための下絵的な役割を担っていたのではないかと推測される。

能楽宗家が所有する本歌を模造して「写し」を作ることは能面においてよく知られているところであるが、能装束においても同様のことが行われていたと考えられる。現代しばしばそのようなことが行われるが、江戸時代にもそれは同じであって、新規に装束を調製するほか、「写し」が作られることもあり、その際には宗家の本歌を忠実に写すことが行われたであろう。ボストン美術館本所収の「紅地団扇花丸藤棚模様縫箔」(作品番号14)に「宝生大夫家之形

Hosei University Repository

／上丸尽し金琴柱／下藤棚／縫箔　全圖／裏緋ゆるし／緋緞子／繻子綸子ニテモ□□／文化十四丑年三月御写被成」と記されていることや、東京国立博物館本所収の「白綸子地唐草模様摺箔」（同前、作品番号76）に「宝生大夫家ノ形／地白綸子唐草金銀摺箔文政三庚辰　十二月廿八日御寫留ニ相成ル」と記されているものなどは、一橋家あるいは田安家でそうしたことが行われていたことを示すものかもしれない。

江戸時代、幕府は能を式楽として武家儀礼の中心に位置づけた。正月の謡初、公家衆饗応能、将軍宣下能、御成能など、幕府の年中行事や儀礼の際に行われた能がそれである。『獻英樓畫叢』所収の能装束図に付記された記述にも、それらの能装束がそうした機会に使用された、あるいは拝領したことを記すものがしばしば見られる。幕府は、観世を筆頭に五座の大夫を徳川家直属の能役者とし俸禄与えたが、各大名もこれにならい、それぞれ城内や邸内に能舞台を構え、各流の能楽師を雇用して藩主自ら演能に励むこととなり、必然的にそれに必要な装束類も整えられていった。

『獻英樓畫叢』が作られた田安家には、江戸時代、「織殿」と呼ばれた工房があったといわれ、安永五年九月十八日、江戸城における奥能で将軍家治が「石橋」を舞った時に着用した厚板・法被・半切もここで制作されたという記録が、田安家の史書『田藩事実』に見られるという。[註4] 寛政七年（一七九五）の津村正恭著『譚海』にも、「また西陣の織屋の女を召下し、邸中にて織物をおらせ、堀川の染物する女をも召れて、機の模様このみ染させ玉ひ、京都の女工をそのまゝ、江戸にて調じさせ玉へり」と記されており、邸内に京都から女の織職人や染職人を呼び寄せ、住み込みでそれらの制作に当たらせていたというから、実際に能装束を制作することができたのであろう。

田安家二代治察は観世大夫を後援したが、若くしてなくなると、天明七年（一七八七）三代当主として一橋家から斉匡が入った。江戸時代中期から後期にかけて一橋家の能指南役は宝生九郎友勝（寛政四年〈一七九二〉没）・弥五郎英勝（文化八年〈一八一一〉没）・弥五郎友干（文久三年〈一八六三〉没）であり、斉匡も宝生流と繋がりがあったと考えられる。

Hosei University Repository

四代斉荘も一橋家出身の将軍家斉の三男であり、以後田安家では宝生大夫との関係が深まり、幕末まで観世大夫と宝生大夫がともに田安家の御用を勤めることとなった。

同時期、将軍家でも一橋家出身の家斉とその子家慶も宝生流を学んでいたから、前記のこととあいまって、田安家では、江戸城での演能及びその他の演能に使用する能装束の制作のためと、将軍家の流派である宝生流に従おうとするために、後の「写し」（模造）制作の際の参考として宝生流の能装束を模写させ、かつその装束に関する聞き書きをさせることとなったのであろう。

例えば東京国立博物館本所収の黒紅地牡丹紅葉模様唐織（作品番号78）の前面半身図には「黒紅地牡丹紅葉いろいろ色糸唐織／文政四年三月廿二日／公家衆京向御能之節宝生大夫被□下候唐織」と記されており、この唐織が文政四年三月廿二日の公家衆饗応能の節に宝生大夫に下賜されたものであることがわかるほか、クレットマン本所収の「黒繻子地立涌飛雲龍丸模様縫箔」（図10・同前、作品番号95）は、前面図に「黒繻子白立涌飛雲丸龍縫箔／文化元申子年三月出来／宝生／文政丁亥年十月廿三日／一橋御屋形ニ而道成寺相勤候節装束／腰巻／同年十月廿六日　玉濱寫之／縮図二枚之内」と記す墨書が見られ、文化元年（一八〇四）三月に新調され、文政十年（一八二七）十月二十三日に宝生太夫が一橋家の屋敷で道成寺を上演した際に腰巻に着用したものであることがわかるほか、その三日後の二十六日には模写図が制作されたこともわかる。

なお、道成寺の前シテの使用する唐織には、流派ごとに異なった決まり模様があり、宝生流は下がり藤または雪持椿といわれているが、東京国立博物館本の初集に背面図、クレットマン本に三枚の部分図が収められている「紅地源氏雲雪持椿模様唐織」（同前、作品番号3）にも「寶生流太夫家形」と記されている。

Hosei University Repository

図10　クレットマン本『獻英樓畫叢』　同前、作品番号95

絵師と模写作業について

『獻英樓畫叢』に貼り込まれた模写図には模写を行った年月日と絵師の名前が墨書されているものがあり、それらは図の脇、左右下方に見られる場合が多い。ボストン美術館本では4図にそれぞれ「文政八乙酉三月廿日　雲満寫」「文政十一子年／四月十九日静雍写」「天保二卯年十月十五日／近藤雍慎寫」「天保二卯年十一月／雍慎寫」の墨書が見られるが、「雲満」「静雍」「雍慎(または近藤雍慎)」の三名とも、他本にもその名が確認される。

同一の絵師によって模写されたものにはその時期が比較的近いものも見られ、例えば東京国立博物館本に「文政十一年子四月廿日寫静雍」と記されるものがあり、ボストン美術館本と一日違いであるほか、クレットマン本には「文政八乙酉年三月十五日　雲満寫」と記され、ボストン美術館本と五日違いのもの、東京国立博物館本第四集には「天保三辰年十月九日雍慎寫」と記され、ボストン美術館本の約一年後の墨書が見ら

Hosei University Repository

れるものがある。おそらく絵師は任期をもって雇われ、集中的に模写作業を行ったのであろう。

また東京国立博物館本及びクレットマン本に収録されている前出「紅地源氏雲雪持椿模様唐織」（同前、作品番号3）に関しては「寶生流大夫家形／紅金源氏雲椿唐織　裏紅ユルシ／大雛形別に御寫之相成有之」（背面図）、「紅地金源氏雲雪椿唐織　宝生大夫家ノ形　文政十三寅年九月五日　雲□寫」（部分図1）、「文政十三寅年九月九日」（部分図2）、「一橋御蔵　雲□寫」（部分図3）の記述が見られることから、複数の日にわたって一点の作品の模写が行われていたこともわかる。

記号等について

模写図には記述のほか、記号に類するものも見られるので、その特徴についても記しておきたい。ボストン美術館本には文字を○で囲んだ記号が数種みられるが、囲まれた文字は「龍」「め」「一」の三種である。このうち「龍」は東京国立博物館本にも見られるが、ボストン美術館本ではこれが長絹に付されているのに対し、東京国立博物館本では摺箔に付されている。この他漢字を○で囲んだものとしては、クレットマン本所収の唐織に「秋」が見られるだけである。東京国立博物館本に多く見られるのは、平仮名を○で囲んだもので、いずれも小袖ものの装束に付されているが、ボストン美術館本では舞衣に付されている。また数字を○で囲んだものは腰帯と壁帯のみに見られる。

模写図裏面に付された記号は、「異」（い）「魯」（ろ）「葉」（は）などの文字と「一」「三」「四」などの数字を組み合わせたものである。文字、数字ともにもとの一文字を訂正して書きなおしたものもあり、もとの数字が二桁であるのに対し、訂正後は一桁の数字となっている。これらの意味もまた、前述の○で囲まれた文字同様明らかではないが、模写図の貼りこみ以前に、一度これらの整理作業が行われていたことがわかる。

Hosei University Repository

記述された技法について

ボストン美術館本の特徴として長絹が多く収録されていることを指摘したが、その生地の記述に「ほら織」（作品番号一・紅地花丸唐草模様長絹）、「織立」（作品番号四・紅地霞萩模様長絹）、「ぬき替」（作品番号五・紅地花籠藤模様長絹）、「ほら織立」（作品番号九・紅地鳥兜楽器模様長絹）が見られる。作品はいずれも絽地に金糸と色緯で模様を表わした縫い取り織であることから、絽を当時「ほら（洞）」または「ほら織」と呼んだことや、色緯と金糸を織り込む技法を当時「織立」「（緯）ぬき替」と呼んだことが分かる。

むすび

以上、東京国立博物館本・クレットマン本と比較しながらボストン美術館本の内容を見てきたが、ボストン美術館本が前記二本と異なる点は、東京国立博物館本・クレットマン本には能装束以外の模写図を収録した冊が含まれているのに対し、ボストン美術館本は能装束の模写図のみを収録している点である。これは偶然ではなく、ボストン美術館本がビゲロウによって入手されたものであることを暗示していると考えられるのである。

前述のように、ビゲロウは日本の染織品に強い関心を持っていたが、特に武家の文化の一部ともいえる能の装束にはとりわけ強く興味を引かれていた可能性がある。それはビゲロウが収集した能装束が一〇〇点を上回る数にのぼり、小袖類を数倍するものであることから窺われる。ビゲロウはたまたま『獻英樓畫叢』のこの冊を入手したのではなく、内容を承知してこれを購入したものと思われる。

本書とともに木箱に収められていた他の冊子類がいずれも染織にかかわるもの、または模様・図案にかかわるものであることから、ビゲロウが染織品の実作品だけでなく、これに関連するものとしてこれら冊子類を収集し、その中

Hosei University Repository

でも『獻英樓畫叢』はすでに収集していた能装束との関連資料として購入したのであろう。

数は不明ながら、今後『獻英樓畫叢』の欠失した何冊かが発見され、既存の三本と合わせることができれば、江戸時代中期から後期にかけての能装束の実態を知ることができるだけでなく、当時の将軍家・大名家と能楽宗家との間で、能装束の制作や使用、貸与などがどのように行われていたのかを窺い知ることができる可能性もある。そうしたことを期待しながら稿を閉じたいと思う。

なお本研究は、文頭に記した科学研究費補助金による研究の一部である。

註1　クレットマン本は、現在、パリのコレージュ・ド・フランスに寄託されている。同本については、西野春雄「コレージュ・ド・フランス寄託『獻英樓畫叢』稿」『国際日本学』第3号（法政大学国際日本学研究センター・平成十七年）を参照されたい。

註2　田安家は、徳川八代将軍吉宗の次男宗武（一七一五－七一）が、享保十六年（一七三一）に江戸城田安門の新邸で興した家。一橋、清水とともに御三卿と呼ばれる。

註3　高浜虚子「東京の能」『能楽盛衰記』（能楽会・大正十五年）。

註4　宮本圭造「徳川家と能　―将軍家・御三家・御三卿と能の関わり―」『二〇〇三年特別展示　徳川家の能』国立能楽堂・平成十六年。